清川村立宮ヶ瀬中学校

研究テーマ：生徒一人ひとりに応じた指導・支援の充実
～極小規模校における協働学習の推進と自己肯定感を高める工夫～

１　実践の目的

本校は、生徒数が極めて少ないため、同年代の生徒同士の接する機会が少なく、他者の発言を聞いて自分の考えを深めたり、理解を深化させたりする機会が十分とは言えない。また、集団が小さく、人間関係が固定しがちで、変化のチャンスが少ない。それゆえ、自分に自信が持てない生徒もおり、自己肯定感を高める必要がある。これらを解決する手立てとして、極小規模校に適した協働学習の研究と、自己肯定感を高める工夫に主眼を置き、研究することとなった。また、前年度の研究主題である「生徒が主体的に取り組む授業」、「ＩＣＴ機器を活用した授業づくり」も継続することにした。

２　実践の内容

（１）校内研究の体制

教務が研究主任を担当し、研究推進委員会は校長、教頭、研究主任で組織する。校内研究会は非常勤を含む全職員で、研究体制を組織する。校内研究会は年 11 回開催した。その内３回を「研究授業と研究協議」とし、うち１回は宮ヶ瀬小学校職員も参加した。研究協議では東京学芸大学教育学部大村龍太郎先生をお招きし、県教育委員会、県央教育事務所、村教育委員会から指導助言を頂いた。

（２）校内研修会

４月 19 日に「極小人数に対応した評価・評定」校内研修会を行った。指導と評価の一体化や自己肯定感を高める評価について意見を交わした。８月 21 日には、清川村教育委員会主催の「ＩＣＴ研修会」に全職員で参加し、タブレットを活用した協働学習の取り組みなど研修した。

（３）研究授業、研究協議の様子

第１回研究授業は６月 28 日に全学年による「和太鼓活動」を行った。本校では、宮ケ瀬の伝統をつなぐ活動として、「宮中和太鼓」の演奏活動を行っており、地域合同の体育祭や文化祭、中学校文化連盟での発表などを通して、生徒の自己肯定感を高める取り組みであると位置づけている。練習計画から運営まで、生徒が主体的に活動した。大村先生には生徒が生き生きと自信をもって活動する姿に評価をいただいた。また、本校の取り組みの課題も指摘していただき、有意義な研修となった。

第２回研究授業は９月 27 日に小中合同で保健体育の授業を行った。極小規模校のため、保健体育は小学校６年と中学１年、２年の合同授業を行っている。自らの得意、不得意を自覚し、

かつ友だちと違いを認め合い、互いに得意な技能を生かすチーム作りを目指す学習活動を通して、一人ひとりに応じた支援の充実と異学年間の協働学習を目指した。生徒は「ティーボール」を通して児童とチームを組み、手本となる教師チームからヒントをつかみ、練習方法や作戦を考えていた。講師の助言では、異学年による協働学習の課題や評価の仕方などわかりやすくご講義いただいた。

第３回研究授業は１月 30 日の２年数学で、全職員で事前に授業の展開を検討し、効果的な協働学習になるよう話し合いを行った。授業は平行四辺形になる条件を利用して図形の性質を証明する問題で、各々の問題を生徒と生徒役の教師が、まず自分で解く。その解き方を説明しながら話し合い、解決していく協働学習を行った。解き方を互いに説明することで、さらに理解を深めることを狙った。生徒と生徒役の教師による学習だったが、個々が考えた解き方をお互いに説明し、質問し合いながらより理解を深めた。教師が生徒役をやることで、効果的な協働学習の事例となった。研究協議では各教科での協働学習の実践と工夫が話し合われ、参考になった。

３　実践の成果

（1）教師の変容

極小規模校の学びの困難な面、特に協働学習による深い学びづくりへの課題を職員間で、教科の垣根を越えて共有できた。その対策を話し合ったことで、解決のヒントがつかめた。その１つとして、ＴＴの活用で、Ｔ２が生徒役を行い生徒と協働し学びを深めることができれば、極小規模（生徒１人）でも効果的な学習ができる。

東京学芸大学教育学部の大村龍太郎先生からは、「小規模校でしかできない強みを活かし研究を進めるべきである。」との助言により、研究の方向性に自信を深めた。

（2）生徒の変容

主体的な和太鼓活動や発表により、周囲の評価を得ることができた。それが生徒の自信となり、自己肯定感を高める結果となった。また協働学習を通して、困難な課題を生徒と生徒役の教師が、協働し解決できたことで、深い学びに繋がった。相手の考えの良さに気づき認め合い、課題を解決した喜びを共に分かち合える。これらの経験が「学び合うこと」の楽しさを生み、学習意欲の高まりに繋がったと考える。教師からの伝達による学習よりも、生徒同士が伝え合い学び合って吸収し「学び」をつくり上げていく協働学習は、生徒の主体性の育成に大きな効果があるといえよう。

４　今後の展開

（1）今後の研究の方向性

極小規模校における効果的な協働学習の進め方を追求するとともに、生徒の言語能力の育成やＩＣＴ機器を活用する協働学習の展開など追求していきたい。

（2）残された課題への対応

極小規模校である本校では、和太鼓活動は生徒の主体性を育む意義のある活動であり、自己肯定感を高める活動でもある。更なる生徒減少の中、その持ち方をどのようにすべきか考える必要がある。